

業務用ナバナの連続収穫技術の開発

和歌山県農業試験場 研究員 嶋本旭寿

1. 背景・目的

和歌山県では平成24年から食用ナバナの業務向け栽培が行われている。ナバナは収穫できない期間がある一方で、ピーク時には収穫が追いつかないなど、収穫期間中の収量が大きく増減するという問題がある。そこで、連続収穫技術の開発を目的に、主力品種である‘CR花かんざし’の播種日や他品種との組み合わせについて検討した。

2. 試験方法・結果

【耕種概要】

播種日	2019年9月11日 花かんざし②は9月18日 128穴セルトレイ
定植日	2019年10月3日 花かんざし②は10月15日 本葉3~4枚時に定植
畝幅	100cm(1条植え)
株間	35cm(2,857株/10a)
基肥	N:P ₂ O ₅ :K ₂ O=16:22:15kg/10a
追肥	N:P ₂ O ₅ :K ₂ O=5:0:6kg/10a×5回 定植後、25日間隔で追肥

結果

品種	規格品収量(g/株)	秀品率(%)	収穫分散効果(*1)	総評
寒咲21号	162.1	72	×	×(収量少なく、分散不可)
CR春華	154.9	84	○	×(小ぶりで葉色薄い)
CR京の春	137.7	91	○	×(小ぶりで葉色薄い)
CR花かんざし①	198.1	74		
CR花かんざし②	167.3	71	○	○(分散可能)
CR栄華	266.1	79	×	△(播種日をずらせば有望)
CR華の舞	214.8	89	○	○(秀品率高く、分散可能)
花ぐるま	194.8	64	○	×(腐敗花が多い)

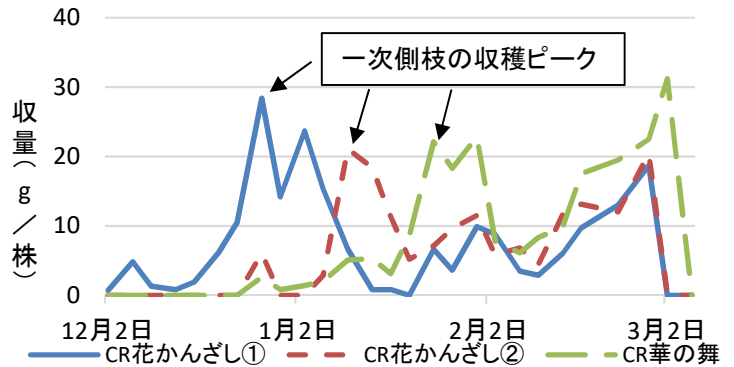
(*1): CR花かんざし①と収穫ピークの分散が可能であったかを示す。

調査期間は頂花の収穫日から規格品1本の重さが4gを下回るまでの日とした。

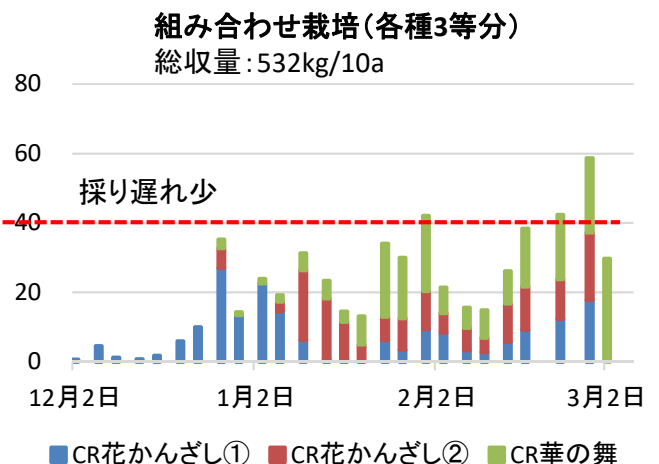
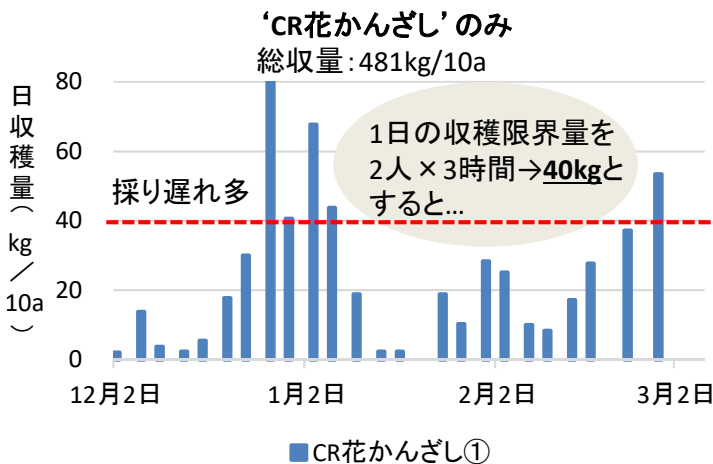


CR花かんざし

CR華の舞



‘CR花かんざし’と‘CR華の舞’を同日に播種し、1週間後に再び‘CR花かんざし’を播種することで、一次側枝の収穫ピークが2週間ごととなった。



組み合わせ栽培することで、収穫期間中の収量を平準化することが可能。収穫ピーク時の採り遅れ防止による収量増や栽培規模の拡大、収穫期間の延長が期待できる。